

平成23年度第2回河川工作物アドバイザー会議論点等整理 (抜粋)

【第1回河川工作物アドバイザー会議論点整理に対する委員等指摘事項】

○ 流路工、玉石連結工などについては検証が必要ではないか？

※流路を固定すると産卵環境ができなくなる。これらの工事は当初の目的を達成しているのか、世界自然遺産地域にふさわしい工事だったのか。

(第2回 A P 論点)

○指摘を受けているイワウベツ川支流赤イ川において、平成24年度より工作物に係るモニタリングを3年間実施し検証。モニタリング方法及び検証に当たっての指標については、委員の意見を伺いながらさらに検討。

○ 長期モニタリング対象河川にはルシャ川を含めるべきではないか？

※イワウベツ川、ルサ川、ホロベツ川はともに周辺部であり、遺産中心部の河川、特にIUCNも注目しているルシャ川での調査が必要。

(第2回 A P 論点)

○事務局案として、ルシャ川での遡上数（台形近似法）調査、ルサ川とホロベツ川での産卵床または遡上数（台形近似法）調査を提示。
○これら3河川は妥当であるが、サケマス資源に対する人為的攪乱が少なく、シロザケ、カラフトマス、サクラマス、オショロコマの4種が自然に再生産している唯一の河川であるテッパンベツ川での実施も検討すべき。モイレウシ川も良好な河川であり、要検討。

○ サケ遡上に関する長期モニタリング手法としてふさわしく、かつ現実的な手法はどのようなものか？

※IUCNの勧告内容等からみれば、産卵環境収容力と正確な遡上数を把握できる調査手法の採用を検討すべき。ただし、予算上の制約などもあるので、調査間隔を長くするなど簡略化の検討も重要。

※17cm以上のオショロコマは海と川を行き来することからバイオマスを正確に評価するのが難しい。しかし、温暖化の有効な指標でもあることから、およその増減をチェックできるような手法はないか。

(第2回AP論点)

- 台形近似法調査の調査頻度等については、精度や経費面を含め、委員の意見を伺いながらさらに検討。
- オショロコマ調査については、林野庁事業である気候変動影響のモニタリング等事業の成果を引き継ぐことで確認。実施に当たっては、経費面等から調査方法及び調査頻度等については、引き続き議論。
- 気候変動の指標としては河川水温よりも地下水温を指標とすべきという論文があり、さらなる検討が必要。

【第2回河川工作物アドバイザー会議における他の論点】

- 今後は、遡った魚が自然産卵できる環境等についての検討が必要ではないか？
※ダム改良を終え、サケ科魚類が上流まで遡れる環境となった。今後は、遡った魚が自然産卵して、世代交代できるような環境づくりが必要。特に人工的に流路を固定した箇所については、産卵床が形成されるような環境にはない。
- 赤い川の堆砂の取扱いについてはどうすべきか？
※赤い川の鋼製えん堤の堆砂は砂質が主であり、自然の推移に任せて堆砂を流すことについて、漁協関係者を含め合意。ただし、スリット化工事に伴って埋まった淵については復元することとし、復元手法を増殖協に相談しつつ検討。
- 今後の河川工作物アドバイザー会議の方向性や計画について検討が必要ではないか？
※他のWGでは、長期的な計画を立て、5年毎に計画の見直しを行っている。河川工作物APにおいても、このような計画を作ることを検討してはどうか。
※ダム改良が終了したが、ダム改良の影響を評価する必要がある（例：ルシャ川の1番目のダムで遡上に失敗している個体を多数確認。）。また、当初のダム改良予定箇所には入っていなかったが、ケンネベツ川とモセガルベツ川については再検討してはどうか。